

1

中村千秋『アフリカゾウから地球への伝言』からの出題です。

問一は「原生自然といえる時代の人間の文化」の持つ特徴を述べている部分を探す問題です。この部分は直後にある「現代社会にオウコウ（横行）している文化」と対比されています。そして、次の段落内にある「本来の人間社会が生み出した文化」と同じものを指します。それは「生活する場所の自然環境と必要最小限に新陳代謝を繰り返すことによって成立したもの」（6 行目）だとあります。このことは第 4 段落で「人間が自然と社会生活の新陳代謝の中で営む文化」ではなくなったと言いなおされています。制限字数からここを抜き出します。

問二は「人間社会が自ら文化の首絞めを行うようになってきている」とある部分を説明する問題です。「自ら文化の首絞めを行う」とはどういうことかを説明することが求められています。傍線部の直前に「自然を資源と見立て」（19 行目）で「消費を拡大していくことにより、その資源すら使い尽くし」（23 行目）たとありますので、「首絞め」とは人間が自然にある資源を使い尽くしてしまい、文化が成り立たなくなる事態になったことを意味します。このことを 2 行でまとめます。

問三は「大自然と文化は共存するのでしょうか。」という問題提起に関して筆者が用意した「共存可能なしかた」とは何かを述べる問題です。「共存」とはどちらかが絶滅するのではなく、どちらも生きることです。筆者はこのあとで「人間世界が固執している伝統や文化を大自然に合わせて変えていく必要がある」（61 行目）と述べ、その具体策として、大自然から搾取した原素材に固執せずに代替品を利用するという文化の変更を提案しています。それによって自然環境の破壊が防げるというのです（63～71 行目）。これらをまとめて解答を作ります

問四は「エジプトはナイルの賜物」という比喻の意味を考えます。エジプト文明の発祥の地ではナイル川の氾濫が起きるたびに人々は水害に悩まされましたが、一方で塩害を防ぐなどの恩恵をももたらしてきたのです。それがピラミッドに象徴される古代文明を形成する背景にあったのです。ところが、アスワンダムという人工物を造り河川の氾濫を防いだことで、それより大きな恩恵が失われてしまったという訳です。これらのことを 2 行でまとめます。

問五は「自然と共存しているもの」の例を探す問題です。正解はエです。

アの「印鑑文化」は人間の一部が必要とする印鑑の原料を象の牙から取るわけですから共存にはなりません。イの「伝統文化」もここでは人間の営みについて述べたものです。ウの「人間中心主義」はそもそも自然を軽んじるものの考え方です。エの「狩猟民族」は自然との「共存と分配利用」(9行目)をしている例として挙げられており、これが正解です。

問六は解答のみ記します。Aはア、Bはイ、Cはエ、Dはウです。

問七は漢字の書き取りです。楷書で丁寧に書いてください。

問八は本文の内容に合うものを考えます。正解はイです。

アは本文で話題にしていることではありません。

イは伝統・文化を人間の傲慢として捉えている点が本文の筆者の主張と同じです。これが正解です。

ウは「自然破壊の背景」として「人間を自然の一部とみなす考え」を挙げているのがおかしい。そういう考え方が出来れば人間と自然は共存できるものしてあげられています。

エは「アフリカの大自然が減びても地球全体にはすぐに影響はない」という考え方は筆者によって否定されています。

2

河合二湖『金魚たちの放課後』からの出題です。

問一は「あのむちゃな思いつき」の内容を答えます。蓮実の両親はボストンに転勤になり、蓮実もついていこうと考えていたようです(74行目)。しかし、そのことを知った花音は、「蓮実を卒業まで家においてほしい」と自分の家族に熱心に頼んだ(3~10行目)とあります。これらをまとめます。

問二は二か所ある空欄に当てはまる同じ言葉を自分で考える問題です。いずれも蓮実が母の質問に対して強く否定する場面です。そこで首を横に振るという行動をしたこととなります。

問三は「絶対的な味方」として蓮実が考えているものが入ります。次の段落にある「お母さんやお父さんの死への恐れや、その次の段落にあるボストン転勤に同行したいと言った思いは「家族」こそが「絶対的な味方」と考えていることのあかしになるものです。

問四は心情の変化を風景描写によってあらわそうとした場面です。実際の風景というよ

り心の中に映った風景が描写されています。傍線部の直後にあるのは蓮実が花音の考える「絶対的な味方」が自分であることに思い至ったことが述べられています。この表現はその心の動きを暗示させ、話を切り出すきっかけとなっているのです。花音にとって学校とは絶対的な味方のいる場所であると気づいたわけです。解答はこれらをまとめます。

問五は蓮実が花音の気持ちを察したうえで自分の思いを述べようと決めたことを意味する表現です。このあとに花音に対して自分の考えを述べている場面が続いています。

「みんな、ずっとここにはいられない」（117行目）ことを踏まえたうえで、蓮実が花音に「この先も友だちでいてくれたらうれしい」（127行目）と思っているのです。「こと」で止められるように文章を整えます。

問六は成句の問題です。「打つ」が関係する語から出題しました。正解は一がオ、二がウ、三がア、四がエ、五がイです。

問七は副詞を補充する問題です。正解はAがイ、Bがア、Cがオ、Dがエ、Eがウです。

問八は本文の内容に合うものを選ぶ問題です。正解はウです。

アは「父親こそが自分の心強い味方だと確信している」が本文中にはない表現です。

イは母親が「自分の子どもころの話を交え、友情の大切さを説く」という話が文中にはありません。

ウは「お母さんたちに遠慮しないで答えて。卒業まで、今の学校にいたい？」（15行目）とあって判断を蓮実に任せようという態度であることが分かります。その点でこの選択肢が正しいこととなります。

エは蓮実が「ボストンに行く決意がゆれはじめている」ことはなく、あくまで離れても友達でいたいという気持ちを花音に伝えようとしている点に注目します。